

# 有機栽培（BLOF）の取組事例 in福岡 Ver.1

～アグリガーデンスクール&アカデミー出身の有機農業者に聴く～

2024年3月 九州農政局福岡県拠点

## 作成の目的

- 有機農業に対する関心の向上のため、土壌肥料学の理論と、長年にわたる作物の観察及び現場で収集・蓄積したデータに基づいた、有機栽培の理論と技術（ノウハウ）であるBLOF（生態調和型農業）の実践の効果（エビデンス）を発信
- 福岡県内でBLOFを学べる民間の農業ビジネススクール「アグリガーデンスクール&アカデミー」出身の農業者への取材を通じ、BLOFの効果とともに、有機農業での就農希望者、就農相談や有機農業の推進に関わる担当者に参考となる取組も紹介

### BLOF理論の概念図



### アグリガーデンスクール&アカデミー（AGSA）

- ・2014年10月、朝倉市内に開校。  
「土の健康、植物の健康、人の健康が繋がる農業」を科学的かつ論理的な視点から学び、研究し、実践力を身につけていくことを目指している。
- ・これまでに県内を中心にのべ256人（有機農業実践基礎コース1～10期生）が入学
- ・2024年1月、国の新規就農支援の対象となる研修機関に認定



## 取組事例の概要

○入校年次の異なる11組のアグリガーデンスクール&アカデミー（AGSA）出身の有機農業者にインタビュー

### ①BLOFの実践効果

**野菜** 収量のデータを把握している有機農業者からの聞き取りでは、慣行栽培又はそれを上回る成績を確保

|       |             |                |      |           |                     |
|-------|-------------|----------------|------|-----------|---------------------|
| ミニトマト | 2.4 t / 10a | [ 1,940kg/10a] | たまねぎ | 3 t / 10a | [ 2,830kg/10a]      |
| にんじん  | 4～3t / 10a  | [ 2,280kg/10a] | かんしょ | 2 t / 10a | [ 1,690kg/10a]      |
| じゃがいも | 2 t / 10a   | [ 1,430kg/10a] |      |           | [ ]は農水省作物統計の福岡県の統計値 |

農業不使用が特に難しいいちごは、普及センターの指導も受けることで昨シーズン（1/2が全滅）より2倍以上増収  
取材時に試食したほうれんそうは、甘味があるとともに、えぐみがなく、普段食べる慣行栽培のものとの差を実感

**水稻** ベテランは栽培品種の特性に見合う収量を確保する一方、水田を借りた時期の関係からBLOFの実践（土づくり）が十分に行えなかったケース（昨年初挑戦）では慣行栽培の水準を下回る結果に。本年（2年目）に期待

|      |         |                |             |                         |
|------|---------|----------------|-------------|-------------------------|
| ベテラン | 米粉用多収品種 | 540～660 kg/10a | (669kg/10a) | ( )は同品種の栽培技術標準手順書に記載の数値 |
| 初挑戦  | 主食用品種   | 396kg/10a      | [517kg/10a] | [ ]は農水省作物統計の該当市町村の統計値   |

**果樹** 慣行栽培の成園（ぶどう）を継承した事例では、BLOF実践1年後に土壌の状態が劇的に変化。2年目（令和5年）は水害や花ぶるいが起きたものの、「甘味と酸味がちょうど良く後味がすっきりした、昔ながらの味」を再現  
他方、飛来するカメムシによる被害の防止が難しい柿は農業使用を継続。今後の技術体系の確立に期待

### ②有機農業での就農動機、就農時及び就農後の課題とその対処

11組のAGSA出身の有機農業者から伺った、有機農業を志向した背景、営農に必要な農地等の確保の方法、当初の失敗談、地域・周囲とのコミュニケーションの取り方、経営を成り立たせるための取組・工夫、将来の構想や目標等を掲載。

(例)

- ・工業畑出身の自分には、有機栽培（BLOF）の理論は面白いと感じ、深い興味を持った
- ・AGSAのOB、地元で有機栽培を長年行う方に積極的に会い、その方の人脈を通じスムーズに農地が確保できた
- ・簡単に栽培できると聞いたオクラを不適切な時期には種したところ、芽は出たものの、その後全滅した
- ・周囲の生産者には、自分から積極的に挨拶し、飲み物を勧める。隣のほ場との境界線周辺は余分に草刈りを行う
- ・JAの正組合員になることで、JAの直売所で販売できる。研修先では学べなかったなすの剪定や管理技術も習得
- ・顧客に自身の思いを知ってもらうため、ロゴマークを作成し商品に貼付。SNS（instagram等）も積極的に活用
- ・試食時の子供の正直な反応と栽培の過程をリンクさせ、次の栽培に活かすため、マルシェに出店している
- ・今後、業務用野菜にシフトしていきたい。そのために複数の有機農業者と需要者を繋ぐ中間事業者の確保が課題

※本取組事例はAGSA及びOBの協力を得て、今後、定期的に更新・拡充。有機栽培（BLOF）に関する研究成果も発信を予定